

『崇神朝（大和）と景行朝（日向）は併存していた』

たかみやしんじ

序章 歌会始と万葉集

歌会始（うたかいはじめ）は年初に和歌を披露しあう「歌会」で、宮中において行われる「歌会始の儀」が特に有名である。平成29年の「歌会始の儀」は、1月13日に皇居宮殿「松の間」で“野”をお題にして行われた。天皇、皇后両陛下をはじめ皇室の宮様のお歌と、一般公募約二万首の中から入選した十首の歌が古式ゆかしい節回しで披露された。

「歌会」は、「万葉集」によって既に奈良時代には行われていたことが知られると言われている。しかしながら、天皇が年始の歌会として催された「歌御会始」が、何時から行われるようになったかは明らかではないという。朝儀や公事を記録したとされる「外記日記」によれば文永四年（1267年）一月、龜山天皇時に「内裏御会始」と明記があり、鎌倉時代には行われていたとされている。

さて「万葉集」であるが、五世紀から八世紀にかけて詠まれた歌が編まれたもので、天皇・貴族から、下級官人、防人など様々な身分の人たちの詠んだ歌が4500首を越えて集められている。一体何故にこのようなものが作成されたのであろうか。「万葉集」には序文がないので、その手がかりがないのである。「万葉集」という書名に手がかりがあるのだろうか。4500首を越えるたくさんの歌が編まれていることから、木の葉をもって歌に例えたという説がある。しかしながら、研究者の間で主流になっている書名の由来は、「古事記」の序文に“後葉（のちのよ）に流（つた）へむと欲（おも）ふ”とあることから、葉を世の意味にとり、「万世まで末永く伝えられるべき歌集」とする考え方である。

「古事記」は、天武天皇の命で稗田阿礼が誦習していた帝紀・旧辞を太安万侶が編纂したものとされている。一方で、太安万侶は「日本書紀」の編纂や「万葉集」の撰にも関わっていたと言われている。又、「日本書紀」も天武天皇の詔勅でその編纂が始まったとされている。これらのことを総括すると、「万葉集」の編纂についても天武天皇が何かしら関わっていたものと考えざるをえないのである。

紀元671年、古代最大の乱といわれる「壬申の乱」が勃発する。これに勝利した大海人皇子は、673年天武天皇として即位する。そして、白村江の敗戦の体験などから「皇親政治」といわれる、豪族たちを大臣に任命せず皇子たち中心に政治を運営する体

制を作り、権力集中を図ることにより強固な政権を志向した。又、宗教改革においては天照大神を祖とする天皇家と、各地の神をその体系の中に取り込む中で、各地で祀られていた神社や祭祀は保護と引き換えに国家管理に服せしめられた。更には、伊勢神宮を重視しこれを日本最高の神社とする道筋をつけたのが天武天皇とされるのである。

本欄（全邪馬連の投稿欄）の小稿（「二つの天孫降臨は連動していた」）の序章において「古事記」と「日本書紀」について考察した。いずれも天武天皇の指示によって編纂が開始されたものであるが、天武天皇はこの両書の編纂によって専制体制の確立・維持に必須の要件として機能せしめようとしたものと考えられる。まずは「日本書紀」であるが、こちらは中国王朝などの歴史書に習い、そのような歴史書の確立が国威発揚にとって不可欠のものと考えられたのであろう。一方、「古事記」はその序文で天皇家の記録である「帝紀」と豪族の伝承である「旧辞」に偽りが多いことを憂えた天武天皇が“実を求めて後葉に伝えん。”としたとあるように、こちらは天照大神を祖とする天皇家の系譜や伝承を記述し、国土支配の正統性を強調した。又、「古事記」については天武天皇の宗教改革との関係についても注視する必要がある。即ち、天照大神を祀る伊勢神宮を日本最高の神社と位置づけ、全国の神社をその体系の中に取り込んだのである。

こうして編纂が進められた「古事記」と「日本書紀」。この両書編纂の過程においては、皇統譜だけでなく各地豪族の調査、伝承の調査、神社や祭祀の調査など詳細に行われたであろう。そのことによって、各地豪族の姿・有様、神社との関わりなどは相当の精度で掌握されたのではないかと考えられるのである。

ところで「万葉集」であるが、先に記述のように「万葉集」は五世紀から八世紀に詠まれた約4500首の歌が編まれた。その中には、貴族から官人、防人まであらゆる階層の人たちの、相聞歌（男女の恋を詠む）、挽歌（死者を悼む）、雑歌（旅で詠む・四季を詠むなど様々）が集められている。まさしく、日本各地における世相や人心が集約されているようなものといえるのではないだろうか。この頃、日本各地で広範に歌が読まれていた。天武天皇はこのことに着眼したのではないかと考えられる。そして、太安万侶に命じてこれらの歌を集約しようとしたのである。その目的は各地の世相や人心を調べることにあつた。そして、上記の各地豪族の調査、伝承の調査、神社や祭祀の調査などと同様、各地の世相や人心は相当の精度で掌握されたのではないだろうか。

宗教改革に関しては、新嘗祭を国家的祭祀に高め、特に大嘗祭を設けたのは天武天皇であろうといわれている。歴史学者の多くが、神道の祭祀を含め後代に伝統として伝えられる主要な宮中行事は天武天皇の創始であろうとされている。そして上記のように「万葉集」の編纂も天武天皇が指示した。とすれば、それに相関して「歌会」の催行を始めたのも天武天皇であつたと推論してもそれほど外していないのではないだろうか。

さて、こうして国家権威発揚と天皇家による専制政治を支えるべく編纂が進められた

「古事記」と「日本書紀」であるがその完成は長期化する。「古事記」が完成されたとされるのが712年（元明天皇時）、「日本書紀」が完成したとされるのが720年（元正天皇時）であった。共に女帝であり、藤原氏が朝廷内で権力を掌握していた頃であった。では上記のように、「古事記」と「日本書紀」の完成が長期化したのは何故だったのであろうか。一つは天武天皇の意向に叶うものを作り上げる必要があったことだろう。即ち、天照大神を祖とする皇統譜とすることが大命題であった。その為には、各地の伝承をうまく繋ぎ合わせる操作も行われたのではないだろうか。又、権力を掌握していた親百濟系とされる藤原氏が関与したことで、新羅系とされる出雲を神代の記述に追いやることが行われることとなる。それらの結果として、各国に「風土記」の編纂を命じ、その内容については記紀との整合性をとるように図らざるを得なくなったのである。因みに「風土記」の編纂は元明天皇時の713年に指示が出されたとされている。

この序章においては「古事記」、「日本書紀」、「万葉集」そして「風土記」の相関関係について論じた。そして、それらが編纂された背景について論じた。その結果、記紀の記述は各地の伝承をうまく繋ぎ合わせた所があるのではないかという疑義が生じた。

本稿では次の章以降において、記紀では繋がっていたように記述される崇神朝と景行朝であるが、大和では崇神朝が日向では景行朝が併存しており、これを記紀編纂者が繋げたのではないかということの論証を試みるものである。

第一章 欠史八代と邪馬台国の時代

紀元前1世紀から紀元3世紀の間の歴史について、記紀が神代記として扱ってしまっており、又、海外の文献なども表現などが不十分であることから、史実を復元するのがなかなか難しい状況となっている。多くの歴史家や歴史愛好家が様々な見解を発表している所以であろう。それはそれで十分存在意義のあることだろう。今後の時代の流れと共に、考古学的発見などと相まって、様々な見解がやがて収斂される日が来るに違いないと思うところである。

中国・後漢の初頭に歴史家班固らによって編纂された「前漢書」。“楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国、歳時をもって来たりて朝献すという。”との記述がある。楽浪郡は前漢の武帝がBC108年に衛氏朝鮮の地に設置した直轄領四郡の一つで今の平壤付近である。そして、前漢の時代はBC202年からAD8年とされている。

AD432年に成立した「後漢書」。その「東夷伝・倭条」にも倭の記述がある。建武中元2年（AD57年）、後漢に倭奴国の使いが朝貢して印綬を賜った。この奴国、位置は倭国の極南海とされている。倭国の南の行き止まりと理解される。倭奴国王が後漢光

武帝より賜った金印と思われるものが福岡県博多湾の志賀島から出土した「漢委奴国王印」とされている。又、安帝永初元年（AD107年）、倭国王師升等が生口160人を献上したとある。

「後漢書」には邪馬台国の記述もあり、後漢の桓帝・靈帝の時代（AD146年～AD189年）に倭国中が乱れた。そして、女王の卑弥呼を擁立することで収まったとある。「魏志倭人伝」（西晋の時代AD285年頃完成したとされる「三国志」の「東夷伝・倭人の条」）にも卑弥呼の記述がある。曰く、“その国（倭国）、本亦男子をもって王となす。住まること70～80年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年すでに長大なるも夫婿なし。景初2年（AD238年）、帯方郡に使いを送り、親魏倭王卑弥呼として金印紫綬を得る。”

紀元2～3世紀に倭国があり、中国の魏と国交をもっていたとしたら邪馬台国と女王卑弥呼の動静は古代日本の歴史を解く重要な鍵と考えられる。しかしながら、日本の歴史書では邪馬台国も卑弥呼も著されないのである。このことは、どのように理解すればいいのだろうか。以降において、順次検討していきたい。

イ) 欠史八代

記紀の記述する初代天皇は神武天皇である。「古事記」では神武天皇誕生までを神代として記述する。そして、神武天皇以降天皇家の始まりとなるのであるが、どうした訳かその後の天皇について、「古事記」は多くを語らない。そのため、現状では第二代綏靖天皇から第九代開花天皇までを欠史八代と称し史実ではないとするのが通説のようである。通説が説くのは主として記紀が天皇の治績を語らないからである。しかしながら、語らないのは語れないからであったのではなかろうか。即ち、語るに足る治績がなかったか語るのを避けたかであったかである。本欄・小稿（「二つの天孫降臨は連動していた」「国譲りは関東で繰り広げられていた」）において詳論したように、神武天皇の誕生は日向の向津姫（記紀のいう天照大神）の力によるものであった。それは、大和において日向の覇権を主張するものであった。言葉を変えて言うならば、それは又大和を拠点にして東国への覇権を睨むものだった。そして、時は流れる。かつてスサノオが亡くなって出雲が弱体化したように、向津姫が亡くなることにより日向の覇権が弱体化していくのである。

日向覇権の弱体化が顕著に現われたのは大和であったろう。神武天皇以降殆どの天皇が皇后を磯城県主から迎えている。この磯城県主は出雲系と考えられ、天皇家は次第に出雲系に染まっていくのである。そして、この頃ダイナミックに日本の歴史を飾っていくのは、出雲国と日向国であったものと考えられる。後に詳しく記述するが「倭国大乱」は出雲と日向の戦いであった。しかしながら、親百濟系とされる藤原氏が記紀編纂に関

わっていたのであるから、出雲や日向が主役である「倭国大乱」や「邪馬台国」を記紀に記述する訳にはいかなかった。結果、出自が日向系である神武天皇以降の皇統譜を細々と記述することでこの時代を埋めることにしたのではないかと推量されるのである。従って、先述した欠史八代の天皇について記紀が語らないのは語るに足る治績がなかったのではなく、正しくは第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの語るに足る資料や伝承が抹消されてしまったからではないだろうか。

稲荷山古墳（埼玉県行田市）から鉄剣が出土した（1968年）。1983年に国宝に指定され、「金錯銘鉄剣」と称されている。それより遡る1978年、腐食の進む鉄剣の保護処理のため X 線による検査を行ったところ、鉄剣の両面に115文字の漢字が金象嵌で表されていたことが判明したのである。そして、115文字の解析によれば、辛亥年（471年）に製作されたこと、当地豪族ヲワケの臣が記載したこと、その上祖の名はオホヒコということ、そしてヲワケはその七代後であることなどが記されている。

この銘文にある“オホヒコ”について、「日本書紀」崇神天皇紀にみえる四道將軍の一人“大彦命”とみなす考えがある。“大彦命”は第八代孝元天皇の第一皇子とされており、このことによって孝元天皇の存在が主張されることになる。しかしながら非実在説は、銘文に大彦命が孝元天皇の第一皇子との記載がなく、鉄剣製作時までに孝元天皇が存在しなかったことから後の世の創作であるとしてこれを認めない。これに対し実在説は、大彦命が孝元天皇の皇子であることは広く知られていたことだったので孝元天皇の名を省いても不自然ではないとするのである。

この鉄剣は銘文によれば471年に製作された。この時には「古事記」も「日本書紀」も発表されていなかった。それでも、上祖“オホヒコ”は氏族の誇る、由緒正しい良血であることを謳ったのである。氏族の誇る、由緒正しい良血といえ、大王家に繋がる血統でしかありえないのではなかろうか。誰の代の時かは不詳であるが、大和から関東に赴任し、発展してきた良血の氏族であった。このように考えれば、やはり実在説の主張することのほうに分があるのではないだろうか。

では、この第二代綏靖天皇から第九代開化天皇の時代に大和では何が起こっていたのであろうか。初代神武天皇が誕生した。そして、暫くはバックに強力な向津姫（天照大神）がいたのであるから、大和を拠点にして、畿内を中心に東は常陸国まで覇権を目論んでいたのであろう。しかしその統治の形態は強固なものとは思われない。統治者を派遣するということではなく、連合体のようなものだったのではないかと推論する。そして、関東など重要拠点には造（みやっこ）の走りのようなことが制定されていたのかも知れないと考えられる。そのような状況の中、既述のように天皇家（この頃は未だ大王家）は次第に出雲色に染まっていくのであった。そして、次第に大和界隈にしか覇権が及ばなくなる。そして、各地には再び力を蓄えた豪族が台頭してくることになるのである。

ロ) オオクニヌシの出雲

「魏志倭人伝」に登場する狗奴国。「魏志倭人伝」では、卑弥呼の邪馬台国の南に位置すると記述される。そもそも邪馬台国の場所には諸説あって、それごとに狗奴国があるのでやっかい極まりない状況である。まずは邪馬台国であるが、大きくは九州説と畿内説の二つである。九州説の場合の邪馬台国の位置は概ね北九州界限とするのがメジャーのようである。この場合の狗奴国の位置は“その南”肥後国あたりとされる。畿内説の場合は邪馬台国の位置を大和とするのが大半であろう。しかしながら、狗奴国の位置は諸説分かれる。大和の南にそれらしい国がないから、尾張になったり、熊野になったりするのである。更にやっかいなのは、「魏志倭人伝」では、“其の南に狗奴国あり、男子を王となす。女王に属さず。”“女王国の東、渡海千余里にしてまた国あるも、皆倭種なり。”とあるのに対し、「魏志倭人伝」より後のAD432年に成立したとされる「後漢書」には、“女王国より東、海を千里度ると狗奴国に至る。皆倭種といえども女王に属さず。”とある。畿内説の場合は、大和から東方向で海を渡る国がない。九州説の場合も、肥後国は女王国から東方向に海を渡った国ではない。そこで、両説は「後漢書」を無視するか、記述の誤謬としてしまうのであるが、そのような態度でいいのだろうか。

本稿では、女王国を卑弥呼が連合した北九州地区の国々の総称と捉える。そして、狗奴国はその東、海を渡って千余里にある国だから、山陰・出雲ということになるのである。東方向に海を渡って千余里の国の候補としては、安芸や伊予も可能性はありうるが、強国・邪馬台国と対峙し抗争を重ねるほどの基盤があったとはし難いのである。後に詳述するが、この邪馬台国と狗奴国の抗争の要因は中国・朝鮮との交易権確保を巡る覇権の戦いであった。このような観点からすると、安芸や伊予では朝鮮南部に遠いのではないかと、女王国によって朝鮮半島への渡航を堰きとめられてしまうのではないかと思われるのである。

さてオオクニヌシであるが、「古事記」では出雲の国譲りの段において、オオクニヌシは出雲を高天原に譲ることを承諾する。そして、代わりに高く聳える神殿に住まわせて欲しいと願い、これが許されオオクニヌシの治世は終わりを告げるのであった。しかしながら本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）で記述のとおり、国譲りは関東で展開された出雲系と日向系の覇権争いのことで、「古事記」が国譲りで描くオオクニヌシはオオナムジのことだった。その頃未だオオクニヌシは居なかったのである。又、「古事記」ではオオナムジはスサノオの娘に婿入りし、スサノオの6代孫とも記述され、やがてオオクニヌシと名乗るのである。この時代の矛盾を解決するには、スサノオの6代孫が即ちオオクニヌシと考えることで答えが得られるだろう。従って、オオナムジとオオクニヌシは別人格で、オオクニヌシは国譲りを経て神武天皇が誕生した時代よりずっと後の人物とされなければならないのである。

本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）第二章渡来人の伝播にて記述した第二の呉の難民、中国江南地区から銅鐸による祭祀を帯同して出雲に土着して発展してきた。一時期スサノオに連合されるのであるが、スサノオの野望は九州へ、大和へ、紀ノ国へと向かっていく。そうした間に第二の呉の難民は力を蓄積していくのである。そもそも、スサノオの本拠は死後祀られた熊野神社界限（松江市）であった。出雲国造は意宇郡に根を張った一族と言われており、国庁も意宇に置かれた。意宇川上流に熊野神社がある。これに対し第二の呉の難民は青銅器を祭祀に用いる人々であった。加茂岩倉遺跡（雲南市）、荒神谷遺跡（出雲市）からは銅鐸はじめ多くの青銅器が出土しており、ここら辺りが第二の呉の難民の活躍した地域ではないかと思われるのである。

こうして興った国が「魏志倭人伝」で記述される「狗奴国」であった。“倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王・卑弥弓呼（ひみくこ）と素より和せず。”と言っている。おそらく、この男王がオオクニヌシと考えられる。最初はスサノオの連合国であったが、六代孫のオオクニヌシの頃には実権はオオクニヌシの方に移っていたのではないかと考えられる。

さて、「狗奴国」はオオクニヌシの時代になり強大化する。そして、地の利を活かして朝鮮半島進出を窺うようになっていくのである。従来、朝鮮海峡を挟んで交易権を主張していたのは後漢朝から印綬を賜った（AD57年）「奴国」であった。ここに、「狗奴国」が割り込んできた。「奴国」はじめ北九州の国々に覇権を主張してきたのである。「倭国大乱」の発生である。そこで、九州地区の国々が採った戦略が邪馬台国・卑弥呼を女王として共立することだった。

ハ）日向国＝邪馬台国

向津姫が亡くなった後の日向国はどうなったのであろうか。去就が気になるのは、オオナムジである。「古事記」ではスサノオの娘・スセリヒメに入り婿するのであるが、本欄の小稿（「二つの天孫降臨は連動していた」）で記述したように、オオナムジは日向に赴任しスサノオと向津姫の娘タギリヒメ（宗像三女神の一柱）を娶る。そして生まれるのが事代主神と同母妹高照光大神命である（「先代旧事本紀」）。又、「古事記」では神武天皇には日向に地元妻（アヒラヒメ）との間に二人の皇子がいた。この内、タギシミミは神武天皇が亡くなった後、妃のイスケヨリヒメを妻とするも腹違いの兄弟に殺されてしまう。もう一人の皇子キスミミノ命については語られるところがない。しかしながら、これらのことは日向には良血の後裔が存在していたことを示しているのであり、次の時代の日向を継承してゆくのである。そして、これらの後裔の中から「卑弥呼」が誕生した可能性は否定できないのではなかろうか。

「魏志倭人伝」は、邪馬台国の場所を帯方郡からの里程で示すのであるが、その里程

には参問（ヒアリング）によって得た情報も含まれているので、正確な位置が読み取れない。その結果、先述したように九州説、畿内説などが林立するのである。しかしながら、落ち着いて考えれば、時代を形成した向津姫（天照大神）や神武天皇の故郷である日向以外の場所に邪馬台国の候補地があるとは考えられない。北九州地区は狗奴国によって攻められて窮地に陥ったのであり、これらの国々ではないだろう。そして、崇神天皇以降に迎える古墳時代において、九州では日向（西都原古墳群）が規模において抜きん出ているのである。以上のことは日向が邪馬台国の候補地として最有力であることを示唆しているといえないだろうか。

上記のように古墳時代は崇神天皇以降に本格化する。それは崇神天皇の出自が日向系であることを示すのである。徐福一行がもたらしたのは稲作や金属精錬技術などと共に道教の教えも重要であった。これが日本流にアレンジされて発展してゆくのである。

「古事記」に描かれる、天照大神を天の岩戸から誘い出す場面を思い出してみよう。まずは、榊の上枝に勾玉の飾りを吊るす、中枝には八咫鏡をかけ、下枝には幣飾りを垂らした。これを岩屋戸に捧げ、天児屋命が祝詞を唱える。そして、アメノウズメノ命（女神）が天香具山のつる草をたすきにかけ、正木の鬘で髪を飾り、手に天香久山の笹の葉を束ねて持って、岩屋戸の前に伏せた桶をととん、ととんと足拍子面白く踊り出す。次第にアメノウズメの心は浮かれていき、しまいには神がかりして狂気乱舞の有様となる。これらが日本神道の原形となっていくのである。神を呼ぶ祝詞があった。幣飾りを施した榊があった。桶を叩く雅楽のもとがあった。（神楽殿で）乱舞する姿があった。おそらく、卑弥呼はこれらのことを一人で演じたのである。そして、神の託宣を人々に伝えたのであろう。

又、「魏志倭人伝」では卑弥呼の墓のことが記述される。曰く、“卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。”である。この頃、既に大物が亡くなると大型の墳丘墓を作って埋葬することが行われていた。この大型墳丘墓も道教と共にもたらされた文化の一つである。これも又、徐福一行が運んできたものといえよう。

徐福一行が日向に土着したのが BC 200 年以降と考えられる。そして、卑弥呼の活躍時代は紀元 3 世紀と考えられる。では、古墳文化や鬼道文化が盛んになるのに何故長期間を要したのであろうか。その原因はスサノオにあるだろう。スサノオが健在の時は銅鐸祭祀が強要されたのである。しかしながら、九州地区ではこれに染まらなかった。だから九州地区には銅鐸の発掘が殆どないのである。そして、スサノオ没後、日向では道教文化が広がり始めるのである。これがピークを迎えるのが卑弥呼によって国が強大化した時となるのである。

第二章 崇神朝時代の和

第一章では邪馬台国時代の主要な国の様子を記述した。本章では崇神王朝時代の様子を眺めてみたいと思う。まずは最初に崇神天皇の出自について尋ねてみたい。

イ) 崇神の出自

記紀が記述する第十代崇神天皇は、第九代開花天皇の第二皇子である。しかしながら、先に記述の欠史八代と言われるように第二代から第九代天皇の实在性に疑問が呈されており、先帝との系譜の史実性が乏しいことから、崇神天皇を大和王権の初の天皇とする説がある。又、神武天皇が「始馭天下之天皇」、崇神天皇が「御肇國天皇」と称され、いずれも“はつくにしらすすめらみこと”であることなどから、両天皇を同一人物とする説もある。更には、神武から開花までは畿内にのみ覇権を主張した政権で、崇神になり初めて全国規模の政権になったとみる説もある。崇神天皇の和風諡号が「日本書紀」では御間城入彦（みまきいりひこいにえのすめらみこと）であり、皇后が御間城姫であることから、入り婿であろうとする説もある。因みに御間城姫の父親は大彦命であり、大彦命は開花天皇の兄（第八代孝元天皇の第一皇子）である。即ち、崇神天皇と御間城姫はいとこ同志ということになっている。

以上にみるように、崇神天皇の出自は諸説入り乱れている。それは、記紀が第二代から第九代天皇までを簡略に記述して、それに第十代崇神天皇を繋げているからであろう。本稿では、「古事記」や「日本書紀」から少し離れてもう少しダイナミックに崇神の出自を推論してみたい。

本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）第二章渡来人の伝播で記述したように、紀元前2世紀頃中国から徐福一行の渡来があった。そして、九州はじめ全日本各地に徐福一行渡来の伝承が伝わっている。本稿第一章では邪馬台国が日向にあり、それは徐福一行が築いた国であることを記述した。徐福一行は九州を基点として太平洋側へ、日本海側へと進んでいったのではなかろうか。太平洋側では紀ノ国、富士山麓、八丈島などに伝承を残す。日本海側では秋田県、青森県などに伝承を残す。では、九州においては日向に留まっていたのだろうか。鉄材を求めていた彼らは火山や大規模な山を目指していた。九州には多くの火山があることで知られている。そして、彼らが最初に目指したのが霊山霧島連峰であった。次に薩摩大隈・桜島や豊後・由布岳を目指した。江戸時代の学者・本居宣長は、魏志倭人伝で「邪馬台国」までの里程に登場する「投馬国」を「都萬神社」がある“婁・つま”から日向に比定したと言われているが、本稿の推論は逆で、“つま”から出て行って開拓したのが豊後・「投馬国」だったのである。更には、投馬国の人々は丹後国にも移りこの国を拓くことになる。豊後国日出町（ひじまち）・真那井と丹後国比治・真名井の類似がこのことを示しているのである。

京都府宮津市は日本三景・天橋立で名高いが、その北、舟屋で有名な伊根町の新井崎

(にいぎき)に「徐福伝説」が伝わる。町名の伊根は稲(いね)に通じる。古代に大陸から稲作がもたらされたという言い伝えと符号する。又、丹後は砂鉄の産地でもあるという。更に、丹後半島には遺跡や古墳が多数発見されており、この地に強大な勢力があったことを示しているのである。そしてそれは、徐福系とみて間違いのないであろう。

さて紀元2世紀後半頃、北九州において「倭国大乱」が起こっていた。既に記述の通り、それは強大化したオオクニヌシ出雲と北九州連合国との朝鮮・大陸との交易権確保を巡る戦いであった。劣勢の連合国は邪馬台国女王卑弥呼を連合国王に立てることになる。そして、戦いは連合国優位に推移してゆく。一方、大和朝廷においても出雲と日向とで主導権争いが起こっていた。神武天皇以降次第に出雲色が濃くなっていった大和朝廷であるが、九州における卑弥呼による日向国復権で大和においても日向系が勢いづいた。そして、崇神を第十代天皇として擁立するのであった。

本稿第一章で卑弥呼の墓のことを記述した。「魏志倭人伝」によれば、卑弥呼の墓には奴婢百余人が殉葬されたのである。一方、「日本書紀」垂仁28年、崇神天皇の皇子・倭彦命が亡くなった時近習の者たちが生き埋めされた。これらは埋葬文化として共通するものがあると考えられないだろうか。そして、崇神天皇が日向系であることを大きく示唆しているものと考えられるのである。(但しこの悲惨さを見た垂仁天皇は、後に殉死禁止令を出され人馬の埴輪を埋葬するようになる)

崇神天皇6年、流行していた疫病を鎮めるべく従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神を皇居の外に遷したのである。そしてオオモノヌシを祀ることで疫病は収束するのであった。ところで、外に出された天照大神であるがその後皇女・トヨスキイリヒメに託され檜原神社(奈良県桜井市・大神神社摂社)に一旦鎮座される。そして、垂仁天皇の時に現在の伊勢神宮内宮に鎮座されたとされる。そのような経緯があり、その後も天照大神を祀るので檜原神社は“元伊勢”ともいわれるのである。“元伊勢”といえば、籠神社奥社真名井神社(京都府宮津市)がある。社伝によれば、伊勢神宮外宮に祀られる豊受大神は神代に真名井原の地から遷座したものとされる。

以上のことから、崇神天皇が天照大神と倭大国魂神を皇居の外に出した後に皇居の中に祀られたのは、日向国女王・卑弥呼とするのが的を得ているのではないかと思われる。同時に祭祀のやり方も卑弥呼の鬼道のやり方を取り入れたものと考えられる。そしてその祭祀を担当したのが、巫女であったと伝えられる倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめ・第七代孝霊天皇・皇女)という事ではなかろうか。崇神天皇は大和朝廷を築いた時に天照大神を檜原神社に祀り、檜原神社は元伊勢と言われる。一方、真名井神社に鎮座していた豊受大神が伊勢神宮外宮に遷座して後、元伊勢と言われるのである。とすれば、この豊受大神が伊勢に遷座した後に真名井神社に祀られていたのも、同じ豊受大神ということで特に支障はないものと考えられる。

しかしながら、現在「籠神社」に祀られているのは彦火明命であり、主祭神が変わっているのである。彦火明命はスサノオの御子大歳尊とみられる。大歳尊は、スサノオの宇佐・日向連合時に活躍し、豊国大魂と崇められたという。この縁（えにし）から主祭神に祀られているものと考えられるが、どうであろうか。大歳尊はスサノオの子で正統派の出雲系である。これを日向系の全盛時代に丹後国一ノ宮の主祭神に据えることは考えにくい。となれば、豊受大神が伊勢に遷座後真名井神社に祀られたのは、卑弥呼か崇神天皇ではないかと考えられる。真名井神社社伝によれば、丹波の「吉佐宮」（＝籠神社）に天照大神が四年間奉斎されたという。とすれば、その後籠神社に祀られたのは崇神天皇しかないのではなかろうか。

天武天皇（第40代天皇・673年～686年・皇后が第41代持統天皇）は、「古事記」や「日本書紀」の編纂を命じたことで有名であるが、又宗教改革を行い、天照大神を祖とする天皇家と各地で祀られていた神や神社とをその体系の中に取り込み、国家神道を形成したのだった。このような事業の中で、天照大神を皇居から追い出した崇神天皇を「籠神社」の祭神として据えておくことが容認されるはずがない。本稿ではこの段階において、「籠神社」の祭神が大歳尊に変えられたものと推量するのである。

少々長くなったが、以上から導き出された結論は、崇神天皇は日向国から丹後国に来た徐福系の一族の出であった。そして、九州における卑弥呼の日向復権に呼応して、大和において第十代天皇に擁立されたということである。「倭姫命世記」（768年五月麻呂の撰と伝わる。歴史学会では伝説の扱い。）の描く、皇女トヨスキイリヒメが丹波（籠神社）から発して、紀伊、吉備などを巡行した後、天照大神を檜原神社に奉斎する過程は、第十代崇神天皇が丹後から発して、権力を主張していった順と考えられないであろうか。

ロ）四道将軍の派遣

上記イ)でみてきたように、この頃の大和政権は畿内中心のものであったと思われる。そして、地方の勢力も各地で強い地盤を築きつつあった。そのような中で政権をとった崇神天皇であったので、四道将軍の派遣などにより政権の覇権拡大を目指すことになっていったのであろう。「邪馬台国の会」を主宰する古代史研究家の安本美典氏は、神武天皇の称号「始馭天下之天皇」は「ハジメテアメノシタシラススメラミコト」と読み、天ノ下を初めて治めた王朝の創始者と解し、崇神天皇の称号「御肇國天皇」は、その治世に大和王権の支配が初めて全国規模にまで広がったことを称讃したものであると解釈すれば説明がつくとされている。

さて、四道将軍（しどうしょうぐん）とは、「日本書紀」によれば伯父の大彦命を北陸道に、その子の武渟川別命を東海道に、丹波主命を丹波国に、吉備津彦命を西道に将

軍として派遣された者をいう。崇神10年に、教えを受けない者があれば兵を挙げて伐つようと將軍の印綬を授けられ派遣された。そして、翌崇神11年に地方の敵を帰順させて凱旋したとされている。各地への遠征により大和に抵抗する者は平定され、民の生活は豊かになった。それで、男は獲物の肉や皮を、女は布や糸を貢物として納めるようになったというのである。この話、余りにも上手く出来すぎているためか、史実と見なされない意見の方が多くようである。畿内以外にも若干の覇権を主張したことをそのように表現したのだろうといわれるのである。

疑問の最大のもは、このような大事業が1年で完了してしまうことであろう。特に「古事記」によれば、大彦命は北陸道から高志に入り、東海道を北上した武渟川別命と相津（会津）で合流するという大遠征であったのである。これが1年で終了するとは考えられない。実際にはどのような事だったのか、「常陸国風土記」の崇神記から推量してみたい。

新治郡（茨城県筑西市）の段。“昔、美麻貴の天皇（崇神天皇）の天の下知ろし食しし御世に、東国の荒ぶる賊たちを言向けようと、新治の国造の祖先となった「ひならずの命」を遣わした。「ひならずの命」がこの地で井戸を掘ると、清き水が流れ出た。新しい井戸を治ったことから新治の名がついた。”

筑波郡（茨城県つくば市）の段。“筑波の県は昔、紀の国といった。美麻貴の天皇（崇神天皇）の御世に、采女臣の一族が「筑筆命」をこの紀国の国造として派遣した。「筑筆命」は紀国を筑筆国に改め、「筑波」とした。”

行方郡（茨城県行方市）の段。“昔、斯貴の瑞垣の宮に大八洲知ろし食しし天皇（崇神天皇）の御世に、東の国の荒ぶる賊を言向けんとして、建借間命（たてかしまのかみ）を遣わされた。建借間命は、軍を率いて賊を言向けつつ、安婆の島に宿を設けた。・・・。”

「常陸国風土記」の序文では、“古へは、相模の国の足柄の坂より東の諸々の県（あがた）は、すべて吾妻の国といていた。常陸という国もなかった。ただ、新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂の小国には朝廷より造（みやっこ）・別（わけ）が派遣されていた。”と記されている。

以上の「常陸国風土記」から推論できるのは、この頃大和（大きくは畿内）以外の東方面は関東だけでなく高志も含めて、多くの地方が小国の林立状態ではなかったかと思われるのである。従って、四道將軍が軍隊を率いて制覇していったというプロセスは成り立ち難いだろう。となると、どのようなことが考えられるであろうか。「常陸国風土記」にあるように、主だった国への国造派遣が主であったろう。そして、その他には書面の伝令であったのではなかろうか。だから、相津であったのは伝令者同士ということであろう。又、采女臣の一族が「筑筆命」を派遣したと記述されているように、実際に国造として派遣されたのは相応の上位者ではあったものと推量される。

又、丹波国と吉備国は、周辺をある程度は勢力下においていた大国であったと思われる。同じ四道将軍でありながら、これらの将軍は管轄すべき範囲が極めて限定的な地域を示しているからである。大和に近いこれらの国は重要な位置づけにするべきと考えたのは想像に難くないのである。

最後に、四道将軍の教えを受けるべき国に出雲や九州地区が入っていない疑問にはどのように答えたらいいのだろうか。それは、崇神天皇の責任エリアが吉備、丹波、紀伊以東ということだったからではなかろうか。即ち、出雲を含めて西は邪馬台国・卑弥呼が担当し統治していたと言う事であろう。

第三章 日本武尊（やまとたける）と景行天皇

「日本書紀」では日本武尊と表記されるが、「古事記」では主として倭建命と表記される。第12代景行天皇の皇子で、第14代仲哀天皇の父にあたる。熊襲征討、出雲征討、東国征討を行ったとされる日本古代史の英雄である。しかしながら、史実の人物とするにはストーリーが余りに雄大且つ劇的に過ぎるので、この時代の英雄を統括して描いているのではないかと考えられているのである。

記紀に描かれる西征は、先ずは熊襲の平定が描かれる。「古事記」では、父（景行）から僅かな従者しか与えられなかった小碓命であったが、女装するなど策をこらし、熊襲建兄弟を討ち果たし倭建（やまとたける）の名を献じられる。「日本書紀」では、父（景行）が平定した九州地方で再び反乱が起きたため、小碓命を討伐に遣わしたとある。従者も与えられている。「古事記」。その後、倭建命は出雲に入り出雲建と親交を結ぶ。ある日、出雲建の太刀を偽物と交換して太刀合わせを申し込み、殺してしまうのである。「日本書紀」では出雲征討の記述はなく、熊襲討伐後は吉備や難波の邪神を退治して水陸の道を開き、天皇の賞賛と寵愛を受ける。

この景行天皇の時代の西征について少し考えてみたい。何故、この時代に征討が必要になったか。それは、熊襲・出雲に代表されるように、西方面の統率に乱れが生じたのである。それは統率者が不在になった、即ち、卑弥呼（或いは後を継いだトヨ）が亡くなって、次ぎの強い統率者が現われなかったことによるのであろう。特に強い勢力を築いたのが九州と出雲であったのだろう。「日本書紀」では景行天皇自ら周防から九州の平定に回ったことが記述されるのである。そして、七年にわたり九州征伐を敢行し大和に戻るのである。

しかしながら、この話本当であろうか。この時代未だ出雲や九州の方が強力であり、大和から西を制定するという状況ではなかったのではないだろうか。従って話は逆で、九州を纏めた景行が、九州で地盤を固めた（王朝を築いた）と理解した方がいいのでは

なかろうか。「日本書紀」の描く景行天皇の九州巡幸の順がその過程を示している。周防国を出て、九州の豊前国京都郡（福岡県行橋市）に行宮（かりみや）を設ける。豊後国で土蜘蛛を退治して日向国に入り、日向高屋宮（宮崎県西都市）に6年留まる。そして、熊県（熊本県）、高来県（長崎県）、的邑（いくはのむら・福岡県）などを巡り、7年かけて還御するのである。天皇がこのように7年もかけて自らが征討に出向くことはいかにも不自然である。このことからして、史実とは考えられない。とはいえ、このような具体的で詳細な記述をしていることは何かの意味があると考えたほうがよい。実はこれこそが、景行の九州地区を纏めた順だったのである。そして、周防から日向国に入るまでの過程はスサノオの日向進出の記憶を採用したものと考えられるだろう。

スサノオは本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）第二章で記述したように、北方系モンゴリアンの一族が出雲に移住した子孫で、稲作や製鉄技術を人々に指導するなど界隈を纏め、BC159年頃出雲王となったとみられる。そして出雲建国の後、越、長門、筑前、豊前にも遠征し「和国」を連合する。北九州に拠点を構えた後、宇佐・日向に進出する。そして、日向を治めていたイザナギ・イザナミを破り、日向国を手中に収めるのである。この時、イザナギとイザナミには向津姫という娘がいた。スサノオはこの姫と結婚するのである。後の天照大神である。そして、この結婚を記紀ではスサノオと天照大神の誓約と描くのである。

上記の記述から考えると、景行の出自は日向国出身の徐福系の豪族ということではなかろうか。卑弥呼の後継・トヨの後、日向を纏めていた豪族の後継ということだろう。AD629年に成立した「梁書」に、晋の泰始二年（AD266年）、倭の王が西晋に朝貢した記事がある。曰く、“卑弥呼の宗女トヨが王に立つ。その後、男王が立ち、中国の爵位を並びうけた。”とある。この男王こそ景行ということではなかろうか。さて、こうして九州を纏めた景行であったが、気がかりは弱体化した大和、そして東方であった。そこで、息子の小碓命を大和に派遣するのである。この小碓命の辿ったルートが、熊襲征伐・出雲征伐であるとすれば「古事記」の記述と整合する。又、熊襲征伐後に吉備や難波の邪神を退治して水陸の道を開き、天皇の賞賛と寵愛を受けるのであれば、「日本書紀」の記述と符合するのである。

次に、倭建命の東国征討について記述していきたい。「古事記」の記述。大和に戻ったヤマトタケルを迎えたのは労いの言葉ではなく、直ちに東征に出発せよとの父（景行）の命令だった。ヤマトタケルは最初に伊勢で叔母の倭姫命に会い、草薙剣と困った時に開けるようにと袋をもらう。そして、尾張を経て相武国（さがむくに）で騙し討ちにあう。国造に悪い神の退治を頼まれ野に入ると火を放たれてしまうのであった。この時、叔母のくれた袋を開けると火打石が入っており、剣で周囲の草を払い火打石で向かい火をつけて火を跳ね返し、国造を倒したのだった。更に東へ分け入ったヤマトタケルは、走水（はしりみず・浦賀水道）を渡ろうとした。この時大嵐にあい、船で海を渡れない。

すると同行していたオトタチバナヒメが海に身を投げて、嵐を鎮めるのだった。やがて東国の蝦夷を平らげて東征を終え、足柄の山に着いた時“吾妻はや”と妻を思い嘆いたと言われる。そして足柄の山を経て、甲斐国、科野国を越えて尾張国に戻り着くのであった。

この後、ヤマトタケルは伊服岐の山の神を平らげるため再び旅立つ。しかし、この平定に失敗し雹に打たれて衰弱して、伊勢国能煩野（のぼの）にたどり着くも息絶えてしまう。すると、ヤマトタケルの骸から抜け出た魂は白鳥となって天に舞い上がっていくのだった。

このヤマトタケルの東征、「常陸国風土記」に記述があるので少し紐解いてみたい。序文。“倭武の天皇が東の夷の国をお巡りになった時、新治の県を過ぎるころ、国造ひならずの命に新しい井戸を掘らせたところ、新しい清い泉が流れ出た。輿をとどめて水をお褒めになり、そして手を洗おうとされると衣の袖が垂れて泉に浸った。袖をひたしたことから「ひたち」の国の名になったともいう。”

信太郡の段。“昔、倭武の天皇が海辺を巡幸して、乗浜に至ったとき、浜にはたくさん海苔が干してあった。そのことから、「のりはまの村」と名づけられた。”

茨城郡の段。“昔、倭武の天皇がこの桑原の岡の上に留まられたとき、神に御食を供えと共に水部に新しい井戸を掘らしめた。この清く香しい水をおいしそうに飲み干され、「よくたまれる水かな」とおっしゃったので、この里の名を田餘（たまり）というようになった。”

行方郡の段。“昔、倭武の天皇の巡行の折に当麻の郷を巡ったとき、鳥日子という名の佐伯が命に反逆したのでこれを討った。そして、屋形野の帳の宮に向かったが、車駕の行く道は狭く、たぎたぎしく悪路であったことから当麻と名づけられた。野の土はやせているが柴が繁る。また香取、鹿島の二つの社がある。その周囲の山野には、櫟、柞、栗、柴などが林をなし、猪、猿、狼が多く住んでいる。また、波須武の野は、倭武の天皇の仮宮を構え、弓箭をつくろったことから名づけられた。野の北の海辺には鹿島の神の分社がある。”

さて、この「常陸国風土記」の抜粋であるが、注意深く読まれた方には既にお気づきのとおり、「倭建命」が「倭武の天皇」と記述されているのである。これはどういうことであろうか。別の箇所では景行天皇の記述もあり、両者が同一視されているということではない。又、神功皇后が正しく息長足日売（おきながたらしひめ）の皇后と記されているので見做して天皇と記されたということでもなさそうである。各地風土記は各国から朝廷に提出されて吟味の上成立した。その吟味には「古事記」や「日本書紀」との整合性をとる必要から修正が加えられたことも指摘されている。かように朝廷側が吟味を加えたのに、天皇と記されたことが修正されないはずがない。とすれば、後の人が原文

を修正して書き写したということだろう。では、何故そのようなことをしたのかという疑問が次ぎに起こってくる。一説によれば、常陸国の箔をつけるためにそのように記したというが、既にその他の箇所でも多くの天皇の巡幸が記述されており、特段「倭建命」を天皇と表記しなくてはならないとも思われない。ということは、矢張り倭建命は天皇だったと考えざるを得ない。

本稿では、倭建命は大王、即ち、天皇であったと推論する。そしてそれは、大和朝廷が弱体化してきたことを憂えて、景行が九州から派遣した天皇であったのである。解り易く系譜を示すと、大和では、十代崇神天皇→十一代垂仁天皇→〈倭建の天皇〉→十四代仲哀天皇、九州（日向）では、オオタラシヒコ（十二代景行）→ワカタラシヒコ（十三代成務）→タラシナカツヒコ（十四代仲哀）→オキナガタラシヒメ（神功皇后）と続くのである。こうして並べてみると、どうも大和と日向は朝廷が併存していたかのように見える。これを、後の記紀編纂者が上手く繋げたということだろう。

上記のように、倭建命は大和朝廷の天皇だったようである。そして、「常陸国風土記」にその巡幸の足跡が残されている。しかしながら、そうだからといって天皇自らこのような遠隔地に長期間征討の旅にでていたとするのも不自然である。そのため、これは大和朝廷の長期にわたる全国への覇権拡大策を倭建命に代表させて描いてみせたとするのが、一般的な見方となっている。本当にそのようなことだったのであろうか。その謎を解く鍵は、“大和王朝は、日向王朝が東国に覇権を主張する拠点であった”という視点で考えることであろう。

本稿第二章において、邪馬台国（女王・卑弥呼）と崇神王朝は併存していたことを記述した。それは、併存というより邪馬台国（女王・卑弥呼）が東国に覇権を主張するために崇神を擁立したと理解したほうがより明確に歴史認識されるのではなかろうか。この視点で考えると、景行が息子の倭建命を大和朝廷の天皇に擁立し東国支配に当たらせたとということがスムーズに理解されるものと思われる。

第十二代景行天皇の子が第十三代成務天皇となる。しかし、成務天皇には子がなかった。そこで、倭建の天皇の子を第十四代仲哀天皇として立てるが、それは大和に立てたのではなかった。日向の第十三代成務天皇を継がせるべく九州に呼び寄せたのである。記紀はこのことを「筑紫檀日宮」を建てたという風に記述するのである。

了

<参考文献>

- | | | |
|----------------------------|--------|--------|
| ・オールカラーで分かりやすい
古事記・日本書紀 | 多田 元監修 | 西東社 |
| ・ヤマト国家成立の秘密 | 澤田洋太郎著 | 新泉社 |
| ・日本古代史を科学する | 中田 力著 | PHP研究所 |

・眠れないほど面白い「古事記」	由良弥生著	三笠書房
・邪馬台国をとらえなおす	大塚初重著	講談社
・台与の正体	関 裕二著	河出書房新社
・日本人の先祖と建国黎明期に 活躍した人々	山下重良著	Webサイト
・口訳 常陸国風土記	神話の森	Webサイト
・倭姫命世記		Webサイト
・歌会始・万葉集・欠史八代・ 稲荷山古墳・籠神社・四道将軍他	ウィキペディア	Webサイト